

生活の中身は意味

四旬節第1主日C年

聖書は、キリスト者の典礼と生活をまとめた一つの全体をなすものと言えるでしょう。聖書はわたしたちに神の言葉を与え、典礼はそのみ言葉を受け入れる光と力になります。キリスト者の生活というのは、理解し、吸収し、知恵に変えられたみ言葉によって養われています。四旬節のこの時期を考えると、旧約聖書の出エジプト記は、まさにこの季節の歩みを指していると言えるでしょう。出エジプト記は、神が、ご自分の民をエジプトの奴隷状態から解放し、苦しみに満ちた荒れ野を通じて、約束の聖地へ導かれたことを伝えています。出エジプト記の出来事は、受難と復活を通してこの世から御父へ脱出をとげられた、主イエスの過ぎ越しに当てはまります。出エジプトの道も、主イエスの道も、このように教会の道に映し出されています。当然、キリスト者の道は、この道なのです。

今日はご一緒に一つのことを考えたいと思います。人間生活、ことさらキリスト者の生活は、意味を見だし、それを生きるための絶えざる闘いであると言えます。人間は生きるために水と食物を必要とするように、どうしても意味を必要とします。オーストリアの精神科医であったヴィクトール・フランクルの体験について、お聞きになったことがあるでしょう。彼はナチの強制収容所に入れられていたとき、重大なことに気づきました。その過酷な環境で生き続けるための唯一の手段は、生きる意味を持つということ、つまり、どのような状況になろうとも、人間にはひとつだけ自由が残されていて、その人生からの問いかけに、自分はどういう意味づけをするかの一点にかかっているということです。

荒れ野をさまようイスラエルの民とモーセの学んだことは、生活の意味についての体験でした。エジプトで奴隷として生活をしてきた人たちは、全人類に対する神からのメッセージを携えて、神の民として生きるように呼ばれました。しかし、道中のさまざまな試練に負けて、ニンニクや玉ねぎを自由に食べられる以前の生活に戻りたいと思う人は多かったのです。それは、その顔を現わさないサタンの誘惑の結果でした。サタンが命を殺すと言うのは、生活の意味を殺すからです。今日の福音では、最初から人殺しであるサタンは自分のマスクをはぎとられます。サタンはまず、主が神と人に奉仕するために受けておられる能力を自分の利益のために使わせようとして、「この石がパンになるようにせよ」と囁きます。次に、権力と名誉の錯覚を持ち出します。「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう」と。しかしこの出会いはサタンの大きな失策となります。ペルソナであり、すべての生活の意味そのものである主のみ前には、サタンも自分のマスクを捨てざるを得ません。つまり、権力と繁栄を手にする条件は、サタンを拝むことだからです。したがって、神のみ旨を成就する道と異なるどんな道も、生活の意味を殺し、サタンを拝むに等しいということが明らかになります。

わたしたちは皆、さまざまの誘惑に出遭います。それはしばしば魅力的な衣を着て現れます。例えば、人びとから盛んな拍手を受けた、ビートルズのジョン・レノンの「イマージン」という歌です。天国も地獄もなく、頭の上にただ青い空しかないと思ってみよう、と誘います。国も、諸宗教も、生きる理由も、死ぬ理由もない。その状況なら、全人類は平和と調和のなかに生きられるのではないか、と言います。彼が極端なことを言う夢想家と批判されるだろうとも思っていました。しかし彼の考えは十分根本的なものではありません。その考えをたどっていくなら、彼の願望に触れることはできます。しかし、境界線をもたない国々も、多くの宗教も、天国も地獄も存在しないだけでなく、本物も偽りもない世界、善を行うことも、悪を行うこともない世界という旅の終着点は、人間の世界ではなく、動物の世界です。動物は、国々にも、宗教にも、本物にも、何の関心もありません。確かに、日々の生活は送れるでしょう。しかし、そこに平和と調和があるとは言えません。

ライオンや熊などは草を食べない限り、生きるために他の動物を殺さざるをえません。いずれにしても、その歌は、わたしたちのうちに存在する傾き、つまり意味からの逃避や、意味を殺すという傾向について教えてください。

主イエスは、その誘惑に徹底的に打ち勝たれます。生きるべき意味を見だし、それをご自分のものにして死ぬまで生き抜かれたのです。それは当然、サタンとの絶え間ない闘いでした。サタンは主のこの世的な命を奪って、勝利を得たかに見えて「やった！」と思った一瞬、実は主に完璧にやられたのです。主は、死と復活の秘儀を通して、すべての人間が汲むことのできる「意味の泉」を完成なされたのです。それで、わたしたち一人ひとり、自分の意味を見だし、それを生きることができるのです。疑いもなく、生活の中でわたしたちは多くの苦しみに出遭います。しかし、聖霊は、わたしたち一人ひとりのうちに、主のみ心になされた業に似たような業をなさいます。それによってわたしたちは、すべての苦しみを主イエスの十字架の苦しみに参与させていただけるのです。それこそが自分と全人類の救いのために役立ち、すべての人が平和のうちに生きられる世界を建設していくことになるのです。これは実現しがたい夢想ではありません。神が人間の歴史のうちに実現なさりたいご計画です。人間の力には不可能に思えることでも、わたしたちのうちに働かれる聖霊にとってはあたりまえで、それこそ、神が人間の世界に注がれた意味を実現することなのです。

J. E. ペレス・バレラ S.J.